

病虫害発生予察情報予報第2号

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要

作物名		病虫害名	6月の予想発生量 ^{注1)}		病虫害防除 のてびきの 記載頁 ^{注2)}	予報対象の病虫害 (抜粋)	
			平年比	前年比			
普通作	早期 水稲	葉いもち	並	並	131~140 142~147		
		イネミズゾウムシ	やや多	やや多	168~170		
	山間 早植え 水稲	葉いもち	並	並	131~140 142~147		いもち病
		イネミズゾウムシ	並	並	168~170		
	普通期 水稲	葉いもち	多	並	131~140 142~147		
		スクミリンゴガイ	多	多	174~180		
	水稲 全般	縞葉枯病 (ヒメビウカ)	並	並	163~164	スクミリンゴガイ	
	特記事項 1. いもち病 普通期水稲で、育苗期に苗いもちが確認された場合には、早急に取り除くとともに防除を行う。例年、本田でいもち病の発生が多い地域では、長期残効型の育苗箱施薬剤を必ず使用する。 2. トビイロウンカ 育苗箱処理剤は、本虫に効果の高い(チェス等)を使用する。施薬量が少ないと防除効果が低下するので、適正な量を処理する。 3. スクミリンゴガイ 発生が多い圃場では、薬剤防除を行う。						
野菜	イチゴ(育苗圃)	ハダニ類	やや多	やや少	204~205		
		うどんこ病	並	並	194~196		
		苗立枯症 (炭疽・疫病)	並	並	198~202		
		アブラムシ類	やや少	並	210~211		
		特記事項 1. ハダニ類、うどんこ病 一部圃場の親株にハダニ類、うどんこ病の発生がみられる。古葉の葉かぎを行うとともに丸噴口等を用いて丁寧に薬剤散布を行い、子苗での発生を抑える。 2. 炭疽病、疫病、萎黄病 炭疽病については10~14日間隔での薬剤防除を実施する。梅雨期は病原菌の感染が拡大しやすいため、発病を認めた場合は、早急に圃場外で適切に処分し子苗への伝染を抑える。					

作物名	病害虫名	6月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除 のてびきの 記載頁 ^{注2)}	予報対象の病害虫 (抜粋)	
		平年比	前年比			
野菜	アスパラガス	茎枯病	並	並	313	 茎枯病
		褐斑病	並	並	314～315	
		斑点病	並	並	314	
		アザミウマ類	並	<u>やや多</u>	317	
		ハダニ類	並	<u>やや多</u>	317～318	
		アブラムシ類	並	並	318	
特記事項 1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 晴天日には施設開口部を開放し通風を図る。各病害に対し3週間間隔を目安とし発生前から薬剤防除を実施する(前年多発生圃場や降雨日が続く場合は間隔を短縮)。茎枯病の発生を抑えるため、降雨時はサイドビニルを降ろし雨の降り込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。						
2. アザミウマ類 5～7月は圃場内への飛び込みが増加しやすい。若茎及び親茎への寄生や食害による被害を防ぐため、虫見板(約20×30cm)への払い落とし(擬葉部を2～3回叩く)により発生頭数を調査し、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。						
果樹	カンキツ	そうか病	並	やや少	216～218	 ミカンハダニ
		かいよう病	並	並	220～222	
		黒点病	並	並	218～220	
		灰色かび病	<u>やや多</u>	並	222～223	
		ミカンハダニ	<u>やや多</u>	並	239～242	
		チャノキイロアザミウマ	並	<u>やや多</u>	236～238	
特記事項 1. 黒点病 伝染しやすい梅雨期に薬剤防除を徹底する。						
2. 灰色かび病 傷果防止のために、一次落果期(6月第1半旬頃)に薬剤防除を徹底する。						
3. ミカンサビダニ 6月上中旬が重要な防除時期であるため、薬剤防除を徹底する。						
4. 新梢の確保 来年の結果母枝を確保するため、アゲハ、アブラムシ類、ミカンハモグリガ等の薬剤防除を徹底する。						

作物名	病害虫名	6月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除 のてびきの 記載頁	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
果 樹	ナシ	黒星病	並	やや少	282～285
		ナシマンコイ	やや多	並	296～299
	特記事項 1. 黒星病 一部で多発生圃場が認められる。発病が認められた場合や長雨等で散布できなかった場合はDMI剤を散布する。				
	2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。				
	ブドウ	黒とう病	並	並	327～329
べと病		並	やや少	330～332	
褐斑病		並	並	332～333	
チャノキアザミウマ		並	やや多	339～340	
特記事項 1. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。					
2. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 小豆大の時期までの防除を徹底する。袋かけ前(大豆大期)に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。					
フキウツイ	特記事項 1. かいよう病 葉の斑点症状や枝の枯れ込みなどの早期発見に努め、確認された場合は直ちに罹病部位を切除する。なお、未発生園で症状を確認した場合は関係機関に連絡する。				
果樹全般	果樹カメムシ病	少	少	かんキツ：245～248 ナシ：299、ブドウ：344	

作物名	病虫害名	6月の予想発生量		病虫害防除 のてびきの 記載頁	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	並	並	398～399	 クワシロカイガラムシ (雄繭)
	クワシロカイガラムシ	多	多	405～406	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	多	403～404	
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	404～405	
	チャノコカクモンハマキ	並	やや多	401～403	
	チャノホソガ	並	並	400～401	
特記事項 1. ナガチャコガネ 二番茶の萌芽開葉初期（5月下旬～6月中旬頃）に、羽化期～成虫飛来初期を迎え、防除適期となるため、摘採前使用日数に注意して薬剤防除を行う。 2. チャトゲコナジラミ 発生園では、二番茶の摘採前使用日数に注意して薬剤防除を行う。					

注1) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注2) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
 なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
 6 ページ目以降：巡回調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

6月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する6月の気象条件については、福岡管区気象台発表の3ヶ月予報（平成28年5月25日）を基に、「気温：平年よりやや高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3ヶ月予報における6月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	40 (23.3℃)	40	やや高い
降水量	30	30 (339.0mm)	40	並

Ⅲ. 6月の予報

水稲（早期、上場地域）

巡回調査 5月19日



1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(図1参照)

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並<±>

前年比：並<±>

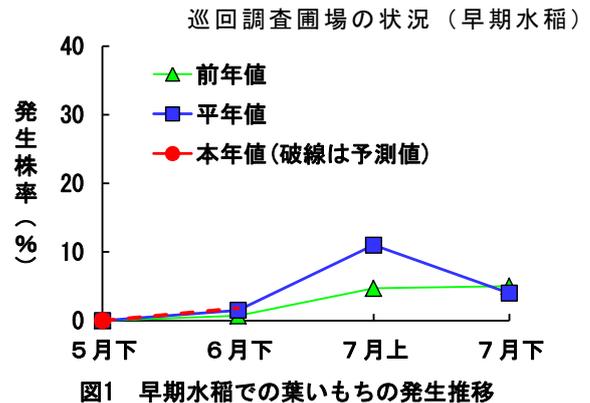
(2) 6月の気象予報

並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 補植用苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので活着後に速やかに処分する。

(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。



2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(図1参照)

食害株率24.7%（平年31.9%、前年28.3%）

平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、粒剤を散布する。

水稲（山間早植え）

巡回調査 5月18日



1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(図1参照)

巡回調査圃場の状況（早植え水稲）

発生株率0%（平年0%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

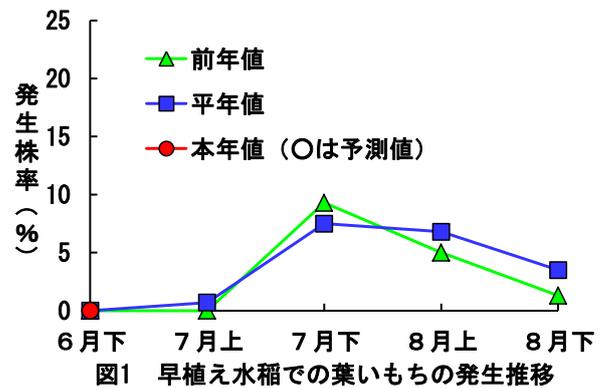
(2) 6月の気象予報

並発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。

(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。



2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査

食害株率0%（平年1.8%、前年1.3%）

平年比：やや少〈-〜±〉 前年比：やや少〈-〜±〉

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、粒剤を散布する。

水稻（普通期水稻）

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

平成27年の普通期水稻（10月上旬）の穂いもちの発生株率は、35.7%（平年9.8%）であり、普通期は平年より多かった。〈+〉

(2) 水稻籾のいもち病菌保菌率

昨年の巡回調査時に県内各地の現地圃場から採取した籾のいもち病菌保菌率は、普通期水稻のうるち品種で3.4%（平年0.6%）、普通期水稻のもち品種で0%（平年0.1%）であり、普通期のもち品種では平年並であるが、うるち品種では平年より高かった（ここ十年で二番目に高い）。〈+〉

(3) 6月の気象予報

並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。

(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

(3) その他については、特記事項を参照する。

2. スクミリンゴガイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 越冬状況

①平成28年4月に調査した用排水路における平均越冬生貝率は、36.0%と平年(44.7%)並であった。〈±〉

②水田内での越冬生貝率は、平成27年12月～平成28年2月の平均気温が7.57℃と平年(6.56℃)よりやや高かったことから、平年よりやや多いと推定される。（過去の冬期の気温と翌春の貝の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。）〈±～+〉

（詳細は平成28年4月28日付け予報第1号参照）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)用排水路・クレークにおいて密度の高い地域では、貝及び卵塊を捕殺する。

(2)発生圃場では、浅水管理を徹底する。

(3)その他については、特記事項を参照する。

水稲（全般）

1. 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(早期水稲)

発生株率0%（平年0%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

②小麦における20回すくい取り（第1、2表参照）

ヒメトビウンカ第1世代幼虫数68.0頭（平年18.5頭、前年26.0頭）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

③小麦から採集したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒状況（第1、3表参照）

保毒虫率0%（平年1.6%、前年0.3%）

平年比：やや少〈-～±〉 前年比：並〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)本病はヒメトビウンカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2)発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、薬剤によるヒメトビウンカを対象とした防除を行う。

第1表 各調査地点におけるヒメトビウンカの発生とイネ縞葉枯病ウイルス保毒状況（平成28年）

調査地点	小麦圃場でのヒメトビウンカの発生	ウイルス保毒状況	
	20回すくいとり虫数 (2圃場平均 ; 5月18~20日)	検定虫数	保毒虫数
	頭	頭	頭
佐賀市1	32.0	40	0
佐賀市2	61.0	40	0
鳥栖市	51.0	40	0
神埼市	49.0	40	0
小城市1	65.0	40	0
小城市2	36.0	40	0
多久市	63.0	42	0
武雄市	119.0	40	0
鹿島市	81.0	40	0
吉野ヶ里町	38.5	40	0
白石町	152.5	40	0
平均	68.0	県内保毒虫率 0/442*100= 0%	

第2表 小麦（黄熟期～成熟期）でのヒメトビウンカの発生状況（20回すくい取り幼虫数）

	平成18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	平成
虫数	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭
(県平均)	41.7	21.2	8.7	22.9	13.0	11.7	2.7	9.0	28.4	26.0	68.0	18.5

注) 5月中～下旬に、県内11～14地点の各2圃場ずつ調査を実施(平成28年の詳細は第1表参照)。

第3表 近年のヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

	平成18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	平成
保毒虫率	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
(県平均)	3.3	2.1	0.9	1.6	1.3	4.2	0.9	1.0	0.0	0.3	0.0	1.6

注) 5～6月にヒメトビウンカを小麦圃場から採集して検定を実施(平成28年の詳細は第1表参照)。

イチゴ（育苗圃）

(巡回調査：5月18日～20日、
親株を調査)



巡回調査時の生育状況

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 親株での発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：1.0%（平年4.1%、前年5.7%）

平年比：並（±）

前年比：やや少（-～±）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。
- (2) その他については特記事項を参照。

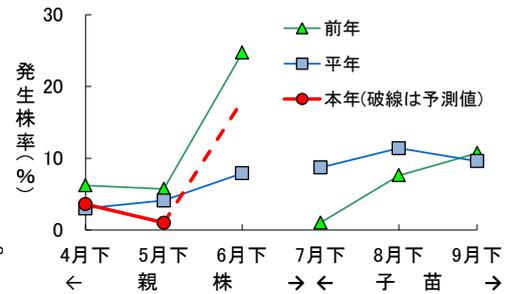


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 親株での発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：10.3%（平年23.4%、前年13.7%）

平年比：やや少（-～±）

前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

並発生条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。
- (2) その他については特記事項を参照。

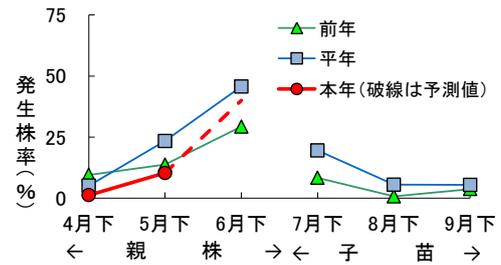


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 親株での発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

並発生条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 降雨が多い梅雨期は病原菌の飛散、感染に好適な時期であるため、防除を徹底する。
- (2) その他については特記事項を参照。

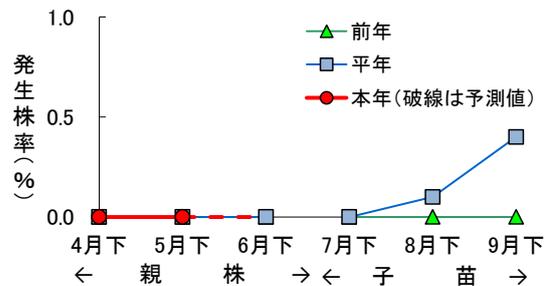


図1 イチゴ苗立枯症の発生推移

アスパラガス

巡回調査（8圃場）
調査日：5月18日～19日

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）



巡回調査時の生育状況

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査 (図1参照)

発生株率：0% (平年0.7%、前年0.6%)

平年比：並 (±)

前年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

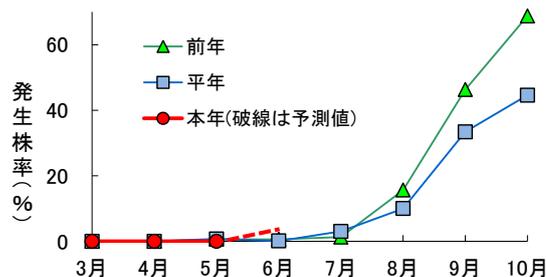


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

2. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査 (図1参照)

発生株率：4.4% (平年2.3%、前年0.9%)

平年比：並 (±)

前年比：やや多 (±~+)

(2) 6月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

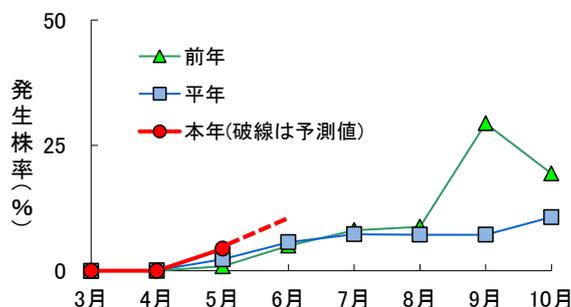


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

3. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査 (図1参照)

発生株率：14.4% (平年28.7%、前年22.5%)

平年比：やや少 (-~±)

前年比：やや少 (-~±)

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

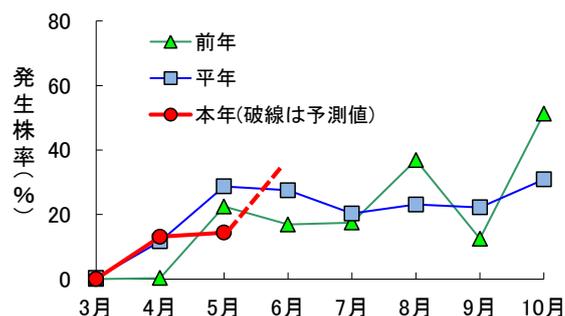


図1 アザミウマ類のアスパラガスでの発生推移

カンキツ

巡回調査 (8圃場)
5月19~23日

1. そうか病

1) 予報の内容



巡回調査圃場の生育状況

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実に薬害を生じる場合があるため、デランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布を行わない。ただし、近接散布の間に200mm以上の降雨があれば薬害少なく散布可能。

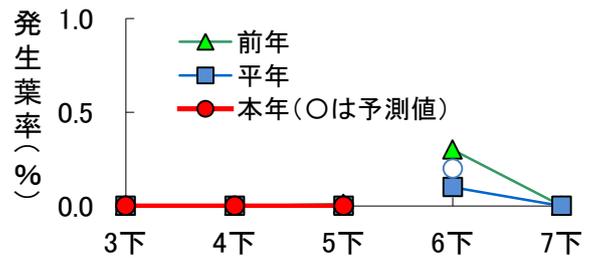


図1 カンキツそうか病の発生推移

（注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査）

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0.5%、前年0%）

平年比：やや少（-～±）

前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤（クレフノン200倍加用）による定期的（20～25日間隔）な防除を行う。
(2) 発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。ただし、強剪定は枝が遅くまで伸長し、本病にかかりやすい期間が長くなるので行わない。

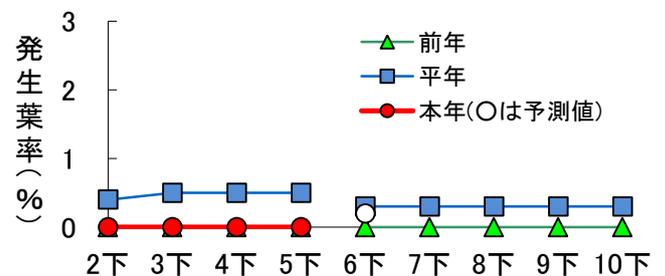


図1 カンキツかいよう病の発生推移

（注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査）

3. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200mm～250mm（マシン油乳剤加用の場合は300～400mm）に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次の散布を行う。
(2) 枯れ枝は伝染源となるので除去し、処分する。
(3) その他は、特記事項を参照する。

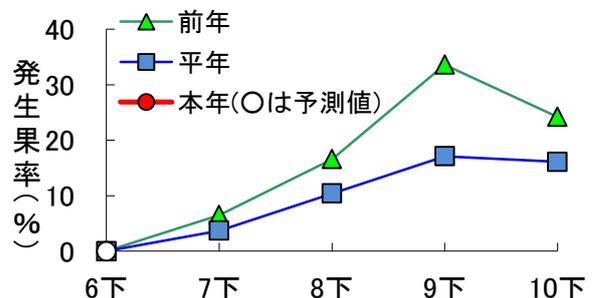


図1 カンキツ黒点病の発生推移

4. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査

発生花卉率：3.3%（平年2.2%、前年13.1%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

(2) 温州みかんの着花状況

着花数が多く、本病の発生に好適な条件となっている。（+）

(3) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 残った花卉は発生源となるため、樹や枝をゆすって人為的に落とす。

(2) その他は特記事項を参照する。

5. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生葉率：5.3%（平年5.9%、前年0.5%）

平年比：並（±） 前年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5～1頭）に防除を行う。

(2) 4月～6月はマシン油乳剤の使用を基本とするが、樹勢が低下している樹では、マシン油乳剤の散布を控え殺ダニ剤で対応する。

(3) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ種類の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。

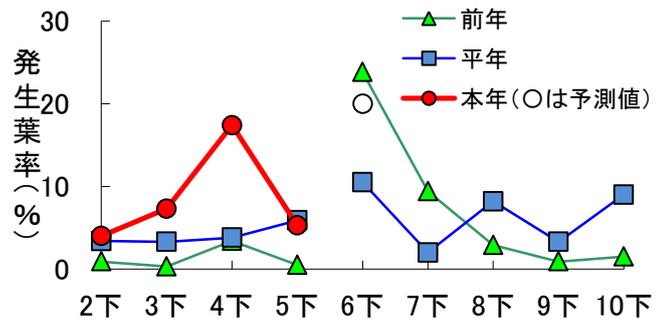


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
（注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査）

6. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 黄色粘着トラップ（図1参照）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや多（±～+）

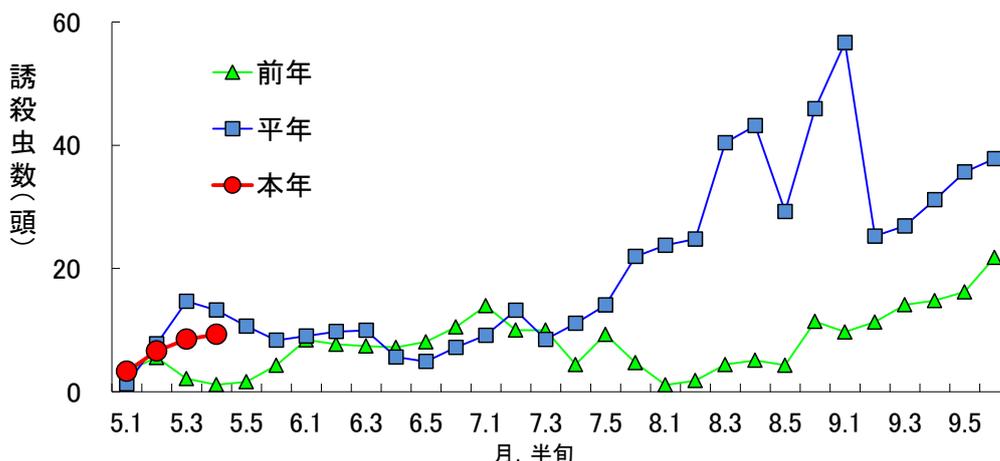


図1 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移 (果樹試験場調査)

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 近年、一部地域では、6月上旬頃にトラップでの誘殺数が増加する傾向にある。被害を防止するため、6月上中旬頃に薬剤防除を実施する。
- (2) イヌマキ、サンゴジュ等は発生源となるので、防風樹として植栽している園では発生に注意する。

ナシ

巡回調査 (6圃場)
5月18日



巡回調査圃場での生育状況

1. 黒星病

1) 予報の内容

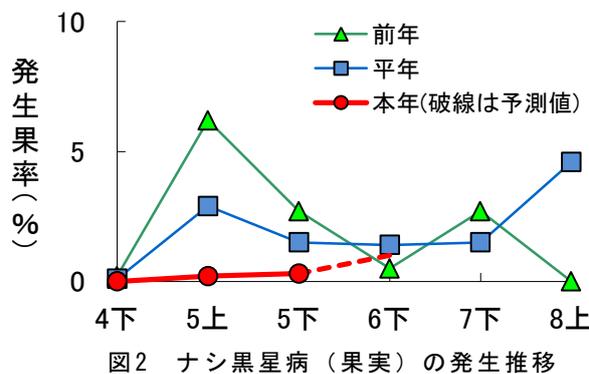
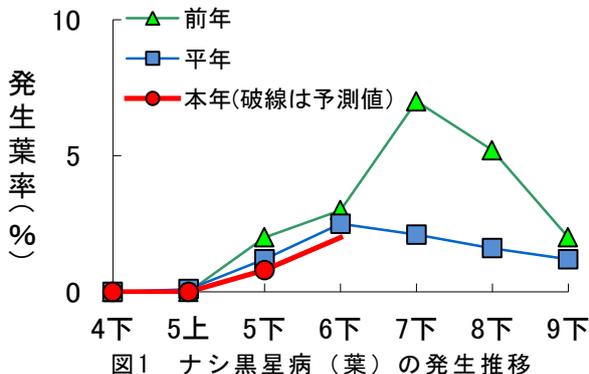
発生量: 平年並 (前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1、2参照)

発生葉率: 0.8% (平年1.2%、前年2.0%)
 平年比: 並 (±) 前年比: やや少 (-~±)
 発生果率: 0.3% (平年1.5%、前年2.7%)
 平年比: やや少 (-~±) 前年比: 少 (-)



(2) 6月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病葉や発病果実は除去し、園外で処分する。
- (2) 6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する。また、6月下旬～7月上旬は主要な伝染期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。
- (3) その他は、特記事項を参照する。

2. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① フェロモントラップ（図1参照）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや多（±～+）

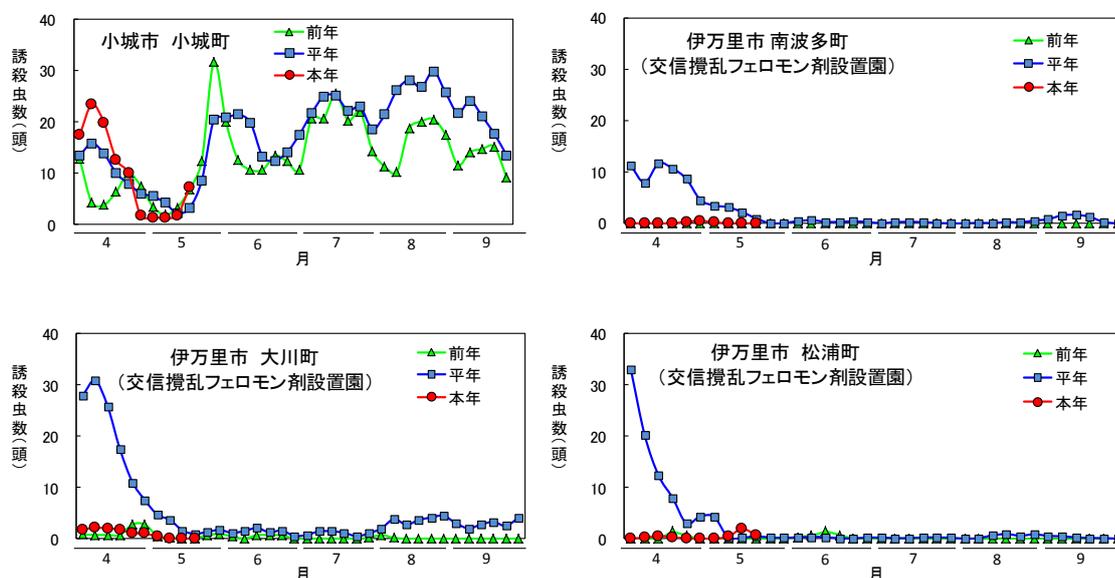


図1 フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺数の推移
（果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査）

② サクラに設置したフェロモントラップ（表1）

サクラに設置しているフェロモントラップ（伊万里市3か所）では、4月から5月第4半旬までの誘殺数の合計は「前年度並」となっている（±）。

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシクイの誘殺数（頭）
（西松浦農業改良普及センター調査）※4月～5月第4半旬の合計値

地点名	前年度誘殺数	今年度誘殺数
南波多町	14	18
大川町	30	30
新天町	37	32
平均値	27	27

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 交信攪乱フェロモン剤の設置を予定している園では、6月上旬までに設置する。

ブドウ

巡回調査（6圃場）
5月18～23日



巡回調査圃場の生育状況

1. 黒とう病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生葉率：0%（平年0.1%、前年0%）
平年比：やや少（-～±）
前年比：並（±）
 - (2) 6月の気象予報
並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

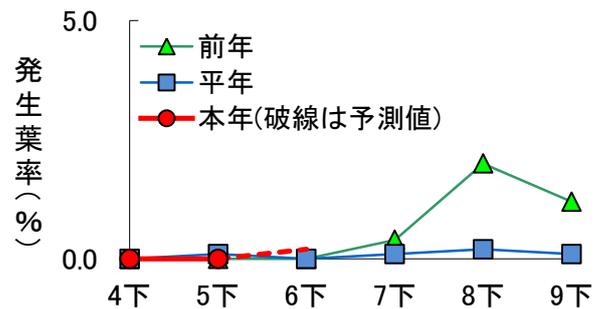


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生葉率：0%（平年0%、前年0.2%）
平年比：並（±） 前年比：少（-）
 - (2) 6月の気象予報
並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を行う。
 - (2) ブドウべと病では、ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。

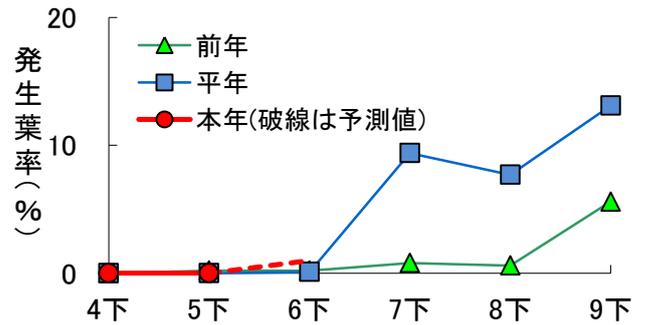


図1 ブドウべと病の発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①黄色粘着トラップ（カンキツのチャノキイロアザミウマ（図1）を参照）
平年比：やや少（-） 前年比：やや多（±～+）
 - (2) 6月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1)6月中旬～7月中旬は主要な加害時期であるので、薬剤防除を徹底する。
- (2)袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。
- (3)袋内への侵入を抑制するために、袋の締め口をしっかりと締める。

果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況（[H27年度対策資料第23号参照](#)）

- ①平均越冬虫数：0.03頭/m²（平年0.36頭/m²、前年0.18頭/m²）
平年比：少くー 前年比：少くー
- ②越冬地点率：9.1%（平年46.7%、前年31.8%）
平年比：少くー 前年比：少くー
- ③以上のことから、本年の越冬密度は平年より少ないと考えられる。

(2) 発生の現況

- ①予察灯（図1参照）
平年比：少くー 前年比：少くー
- ②フェロモントラップ（図2参照）
平年比：並く± 前年比：並く±

3) 防除上注意すべき事項

- (1)越冬密度は地域によって異なるため、園内をこまめに見回り、飛来状況に注意し、寄生が認められた場合には、直ちに防除を実施する。
- (2)果樹カメムシ類は、樹高の高い樹木に一旦飛来し、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないように剪定をする。

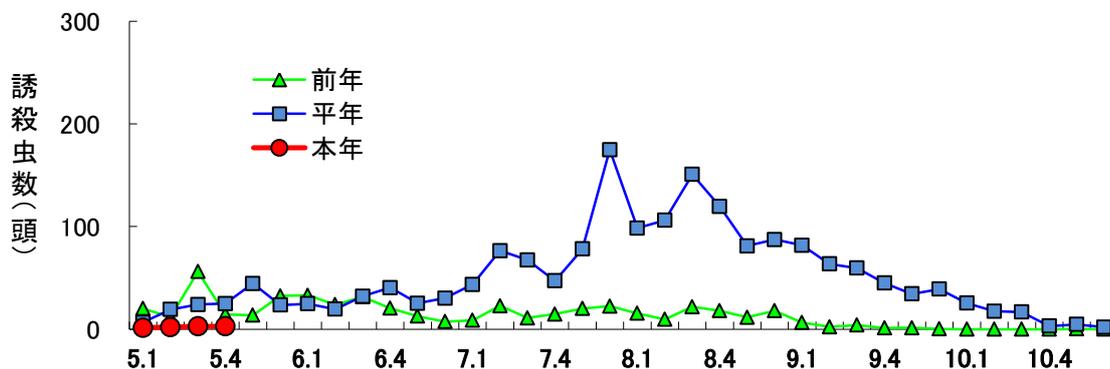


図1 予察灯（佐賀市、小城市、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

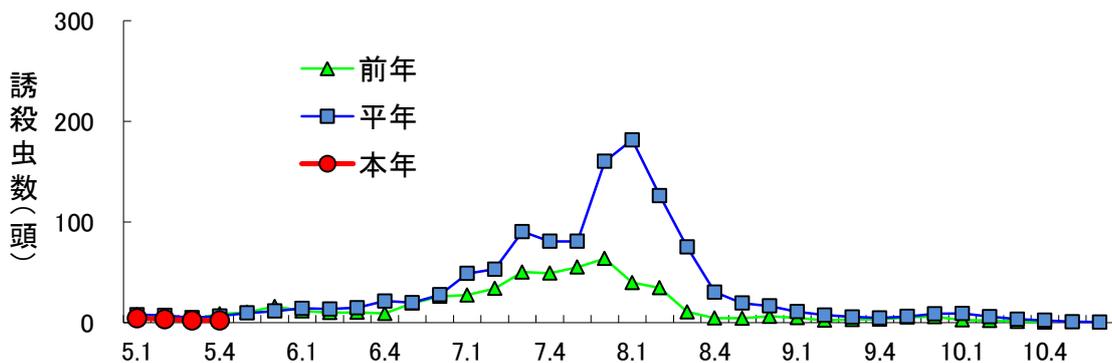


図2 フェロモントラップ（小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉、唐津市鎮西、基山町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

茶

巡回調査（7圃場）
5月19～23日



巡回調査圃場の生育状況

1. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

発生株率：11.4%（平年24.0%、前年9.3%）

（発生圃場率：71.4%）

平年比：やや少く（～±）

前年比：並く（±）

(2) 昨年の発生状況

昨年秋以降に越冬世代の密度が高くなっており、一部圃場で多発生となっている。（＋）

(3) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤による防除は成虫に対して効果がほとんどないため、幼虫ふ化期（5月中・下旬、7月中・下旬、9月中・下旬）をねらって防除を行う。

(2) 散布量を多くし、枝全体がぬれるようムラなく薬液をかける。

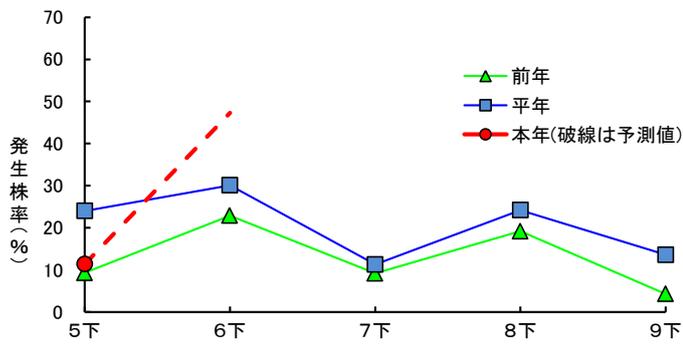


図1 クワシロカイガラムシの茶での発生推移

2. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

発生株率：3.1%（平年3.4%、前年2.4%）

（発生圃場率：71.4%）

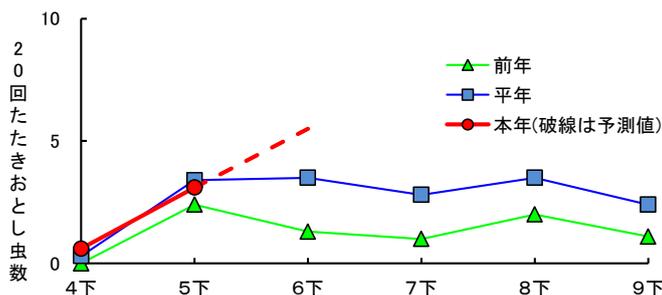


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

平年比：並（±）

前年比：並（±）

3) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏にも薬剤が十分にかかるよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1、2参照）

① 発生株率：3.0%（平年18.5%、前年8.3%）

（発生圃場率：57.1%）

平年比：やや少（-～±）

前年比：並（±）

② 吸引粘着トラップ

平年比：並（±）

前年比：並（±）

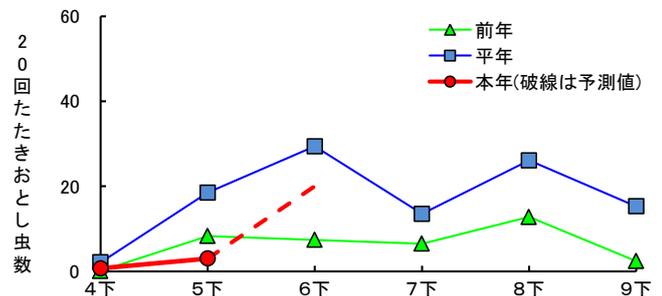


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

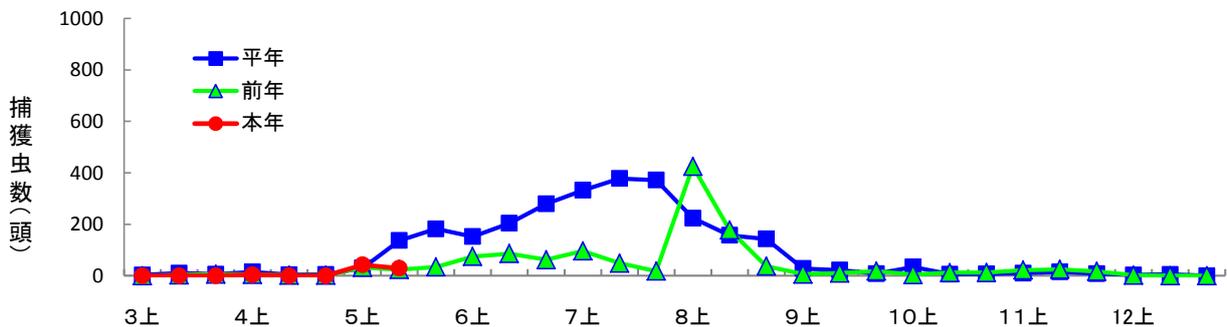


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの捕獲虫数の推移
(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 展葉初期の防除を徹底する。

4. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

発生株率：0%（平年0.1%、前年0%）

（発生圃場率：0%）

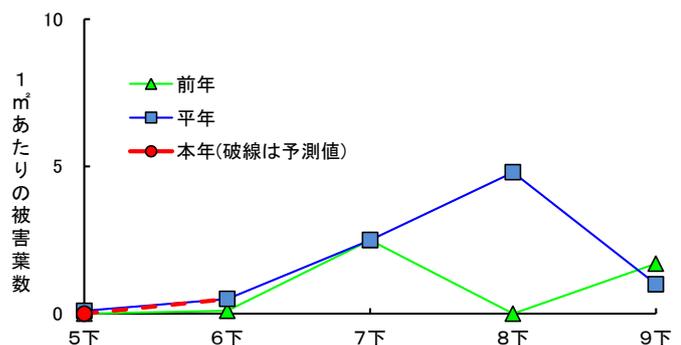


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の推移

平年比：やや少く（－～±）

前年比：並く（±）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉がつづられ始めると防除効果があがらないため、つづられた葉が少しでもみられたら直ちに防除を行う。
- (2) 二番茶期の防除は、生育状態によって摘採日を決め、摘採前使用日数に注意して薬剤を選択する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に4月26日～5月24日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）

作物名	病害虫名	九州・沖縄・山口		その他の都道府県	
		注意報	警報	注意報	警報
麦類	赤かび病			5/12 滋賀県	
タマネギ	べと病			4/28 香川県	
果樹	果樹かみん類			5/17 滋賀県	
モモ	せん孔細菌病			5/12 長野県	

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）

作物名		病害虫名	発表日及び発信元
野菜	キュウリ	退緑黄化病（CCYV）	4/26 徳島県
	タマネギ	えそ条斑病（IYSV）	5/2 愛知県

6月1日～8月31日の3か月間は農薬危害防止運動期間です。

農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

◎ほ場のみならず、公共施設内の植物、街路樹及び住宅地に近接する場所において農薬を使用する場合は、**農薬の飛散が周辺住民や子供等に健康被害を及ぼすことがないようにしましょう。**

◎農薬やその希釈液、残渣等はペットボトル、ガラス瓶等の飲食品の空容器等へ**移し替えたりせず、施錠された場所に保管する**等、保管管理を徹底しましょう。

◎土壌くん蒸剤を使用する場合は、農薬の容器に表示された使用上の注意事項等に従い、防護マスク等の防護装備の着用、施用直後の**ビニール等での被覆等を実行**等の安全確保を徹底しましょう。